

でだ。こんぞ。

むがしむがし、山のお寺に、おっさんと、こんぞが住んでいました。ある日、小僧は、山に栗こ拾いに行きました。えげばえぐほど、おっきい栗こが落ちています。むちゅうになつて拾つてえるうち、気がついてみたら、ずっと奥山にきていました。すると、やぶの中から、おなごが出てきました。「これこれ小僧、晩げ、栗こ、いつぱい煮ておくから遊びに來い」といいました。「んだたて、おら、おっさんにおごられるおん」と小僧がいったら、「んだたて、おれあ、おめあのおぼつたあだど、おっさんなどおごらねえや」といいました。小僧は、お寺にもどつて、おっさんにその話をしました。おっさんは「それあうそだ。鬼んばだがら、行がねあはあえ、えぐな、えぐな」といいました。小僧は、行きたくてたまらないので、「んだたて

おっさん、その女の人は、おめあのおぼつたあだてゆつたよ。ニコ／＼笑つてだえ」和尚さんは「そなたにえぎだやごたば、行つてみれ。お札けるがら、あぶなくなつたらこのお札つかねげでこえ」といって、お札を三まいくれました。小僧は、大よろこびで山へ行きました。こんぞあ、ばんばどさ「ばんば、栗こ食わせれ」て、ゆたば、「えっぺあにおいだがら、なんぼでも食えよ」といいました。小僧あ、鍋の前さねまつて、食つた、食つた、腹、ばんばんでぐなるまで食いました。「くつたがこんぞ、したらあどあねれな」とばんばが言ったので、小僧は、となりのさしきで、ぐすりねてしまいました。夜中に、小僧は眼をさしました。雨が降っていました。小僧は雨だれの音をきいていると、雨だれは、「こんぞ、あぶねあぞテンテンテン」「こんぞ、あぶねあど、テンテンテン」ときこえました。こんぞがハツと思つて、となりのへやのいろりばたをそつと見ると、ばんばは、いろりばたで、大きな口をあけて、かねをつけていました。その眼はギロギロ光つて、かみをふりかぶつて、いつのまにか、恐ろしいおにばんばになつています。小僧あ、どでんしてしまつて、何としたらえべがど思ひ、小便するふりしてねげるべーと思ひました。「ぼっぱア、小便しだやくなつたア」「小便してくる」といいました。ばんばは、いきなり立つてきて、帯で小僧あどごつなぎました。小僧あ、ずる／＼帯ひきずつて便所に入り、大急ぎで帯をほどき便所の柱さゆわいつけました。それから、おっさんからもらつたお札を出して、べろでなめて、はつて、「おれの身代りになつてくれ」といって、どん／＼にげました。ばんばは、小僧あ、あんまりおそいおんだがら、「でだがこんぞ」と帯をぐえつとひばりました。すると、おふだが小僧のかわりになつて、「まだ、まだ」と答えました。ばんばは又かねつけはじめました。どうも長過ぎるので、「でだがこんぞ」「まあだ、まあだ」「でだがこんぞ」「まあだ、まだ」ばんばは、小僧あ、あんまり長いので、「なんだこのこんぞあ、うそこえで」と、ぐえつと、力いっばい、帯をひっぱりました。それで、便所の柱がスポツと抜げて「まあだ、まあだ」といながら、すつとんで來ました。ばんばは、とびあがつて、「こんぞあ、ねげだな」と、はだしで、ぼっかけできました。「小僧、待でー」といいながら、手をのばしました。小僧は、つかめらえるど、鬼ばんばにくわれてしまうので、またおっさんからもらつたおふだをふところからだして「ごさ大きな川ではれ」とうしろむいで投げました。すると、見る見るうちに大きな川ができて、音たで水が流れました。鬼ばんばは「なにー、こんただ川」とさがんで、じゃがじゃが泳ぎ出しました。小僧あまだ、むじゅうでねげましたが、又つかまりそうになりました。小僧あ、また、おふだだして、「ごさ、大きな砂山ではれ」とさがびました。すると小僧のうしろに、でえんと大きな砂山がでげました。「なあに、こんただ山あ」とおにばんばは、わたわたとのぼりはじめたが、ざらざらと、砂がくずれで、どうしてもものぼれません。鬼ばんばははざしりして、「なんだ、こんた山」「なんだ、こんた山」とはいあがり、はいあがり、またこんぞどご、どんどん、ぼっかけてきました。その間に小僧はようやとお寺さ着いで、ドンドンお寺の戸をたたきました。ところがおっさんは、ながなが起きてくれません。「おっさん、おっさん、おにばんばぼつてきた

がら、あげでけれ、はやぐあげでけれ」小僧は、泣き声たで、戸をたたきました。「なに、おにばんばだあ、やつぱしおれあゆたとりだべ」おっさんはやつと眼をさましたようです。「おっさん、はやぐはやぐ、おにばんばそごまで來たえんて」「まで、まで、ふんどししめで」「早ぐよ、おっさん、早ぐ」「まででまできもの着て」「おっさん、早ぐ、早ぐ」「まで、まで帯しめで」「早ぐた、おっさん」「よし、よし、ほら、開げだ、早く中さ入つて、戸だなさかくれれ」小僧が、お寺さころがりこんで、戸だなの戸しめだば鬼ばんば、お寺の中さ入つて來ました。「和尚、和尚、今、小僧あ來ねがつたが」「ん、小僧が、まだ來ねエども」「なんだ和尚、うそこぐな、たしかに今來たはずだ」鬼ばんばは、寺の中さ入つて、あたりをグルグル見てフンフンにおいをかぎました。おっさんは、いろりばだにすわり、餅をあぶりはじめました。「まで、まで、ばんばそんなごやめで、餅あぶるがら、餅でおかねが」「んだが、餅が、餅もえな」鬼ばんばは、急に腹がへつて來たので、どっかりいろりばださねまて、餅をくいはじめました。和尚さんは、ゆつくりゆつくり、餅をあぶつていましたが、「ばんば、おれど化けくらべしねあが」といいました。「よし、やるが、和尚、何に化ければえ」「んだな、ばんば、んが、まず、納豆えなて見れ」ばんばは「よし、ようし」と立ち上がつて、みるまに、なつとに化げでしまいました。和尚さんは、「ああばげたぢやなあ、ばんば」といって、その納豆を、餅につけて、べろつとみんなたべてしまいました。とっぴんばらりのさんしょのみ、さんしょくでがら山さえげ、にんにくくであがら川さえげ、なんばくであがらおらえさこえ。とんぴんばらりのぶ

注1 義家にまつわる伝説の中の城跡については、この他に、現在稲川役場庁舎のあるところに古城址の碑があり、これは清原氏の家臣梶美作守の居城跡と伝えられている。

2 おはぐろのこと。

鉄片を茶の汁又は酢の中につけ、酸化させたその液にふし（付子、附子、五倍子）、ヌルデの若芽若葉などに、一種のアブラムシが寄生し、その刺激によって生じた瘤状の虫癭（ちゅうえい）。葉軸の翼にあつまつて生ずる。紡錘形で、内部は空洞、皮壁は帯黄褐色の絨毛をこらむる。タンニン材として、薬用、染織用、インキ製造用に供する。昔は、婦人が歯を黒く染めるのに用いた。（広辞苑）